

ワークショップ「コミュニケーションの中のメタ認知 - 高次脳機能障害や精神障害を抱える人々とのコミュニケーションギャップを手掛かりとして - 」

Metacognition in Communication: Through Observations of Conversations among the Communication-Handicapped

オーガナイザ：榎本美香[†]

話題提供者：榎本美香[†]，岡本雅史[‡]，高梨克也[‡]

指定討論者：伝康晴[§]

Mika Enomoto, Masashi Okamoto, Katsuya Takanashi, Yasuharu Den

[†] 東京工科大学, [‡] 京都大学, [§] 千葉大学

Tokyo University of Technology, Kyoto University, Chiba University

menomoto@media.teu.ac.jp, okamotoma@media.teu.ac.jp, takanasi@ar.media.kyoto-u.ac.jp

Abstract

This workshop deals with metacognition in communication through observations of communication gaps which explicitly or implicitly exist in the conversations among or with the communication-handicapped people. Enomoto illustrates how the coherence between each storytelling functions in metacommunication. Okamoto shows the differences between the speaker's metacognition and the hearer's analyzing linguistic devices used by the communication-handicapped. Takanashi discusses why metacognition researches have not so far focused on the metacognition in communication.

Keywords — metacognition, metacommunication, conversation, cohesion, coherence, communication strategies, logical type, the communication-handicapped

1. はじめに

従来のメタ認知研究は学習や記憶，注意といったテーマの下に進められることが多く，コミュニケーションという動的なインタラクションにおいてメタ認知がどのような局面で使用されるかについての研究はほとんど行われていない。しかし，関連性理論(Sperber & Wilson, 1986/1995)や「心の理論」研究(Baron-Cohen et al., 1985)から，他者の行動や発話を理解するためにはメタ認知的視点が必要となる局面のあることが明らかになっている。また，伝らの研究(小磯・伝, 2000; Den & Enomoto, 2007)は，コミュニケーションにおいて発生した相手との齟齬や誤解を解くために，人は自己中心的視点からメタ認知的視点への転換を行っていることを示唆している。これらの研究から，コミュニケーションを円滑に進めるにあたり，人は随時メタ認知を利用していることがわかる。

コミュニケーションにおいて利用されるメタ認知として，以下の4つのものを現在我々は考えている。

他者認知: 他者の認知的・心的状態に対する認知
解釈的自己認知: 他者から解釈される自己の認知的・心的状態に対する認知

参与役割認知: 会話参与者どうしの関係によって決まる社会的属性(「医者，患者」「夫，妻」など)や各発話に対する会話役割(「話し手，聞き手」など)に対する認知

会話場認知: 会話参与者の人数，会話タイプ，雑音など周囲の認知環境などに対する認知

これらのメタ認知を利用してなされるコミュニケーションをメタコミュニケーションと呼ぼう。

高次脳機能障害や精神障害を抱える人々(the Communication Handicapped; 以下CH)は，他者認知の欠如ないしは不全といったメタ認知的問題を抱えているため，しばしば会話上のトラブルを引き起こす。そして，そのトラブルに対するアウェアネスすらないために，トラブル解消を手こずらせる。この状況を コミュニケーションギャップが生じている状態と呼ぶことにすれば，コミュニケーションを円滑に進める上でどのような種類のメタ認知機能が関わっており，コミュニケーションの参与者間でその不在や不全がどのような相互的影響をもたらしているのかが明らかになるのではないだろうか。

本ワークショップでは，CHのコミュニケーション上の 逸脱 行動を単にCH個人内の病理と捉えるのではなく，周囲の人々との「間」にある問題として捉えなおすという議題を提案する。そして，コミュニケーション上の 逸脱 を手掛かりに，メタコミュニケーションを成立させるメタ=ルールに

ついて考えたい。このことにより、異なる視点をもつ者どうしが会話という相互行為の中でどのように他者の視点を学びとり、自らの行動を調停しているのかというコミュニケーションにおける本質的な問題を浮き彫りにする可能性が開けると考える。

発表者榎本は会話を一連の流れにまとめあげるための語りと語りの間の結束性に関わるメタコミュニケーション事例を紹介し、岡本は談話中で通常利用されるヘッジ表現や理解提示方略がコミュニケーションにおけるメタ認知にどのように関わっているかを考察し、高梨はメタ認知がメタコミュニケーション的な調整においてどのような役割を果たすかについてその認知科学的枠組みと展望について概観する。

2. 会話がほどけるときの精神障害者の会話にみられるメタコミュニケーション(榎本)

現在の精神医学の潮流として、精神障害一般を「認知機能障害」という言葉で捉えようという気運がある。認知機能障害とは、言語を記憶し(言語性記憶)、物事に注意を向け(注意機能)、それに基づいて行為・運動を行う(実行機能)という一連の認知活動が障害された状態を指す。記憶や注意や行動の障害という概念はいずれも個人に逸脱の源を求めるものであり、CH個人の認知活動の医薬品による活性化やトレーニングへと向かう。

しかし、慢性期(妄想や錯乱などの症状が比較的治まった状態で、薬物療法等による治療の効果があまり見られなくなった時期)に入った精神障害者と接するならば、活動量は少ないものの、それほど認知機能に障害があるとは感じられない。個人の発話を取り上げるならば、Kraepelin (1910)の言う支離滅裂、思路脱線、常同や、Bleuler (1911)が、観念と観念との結合の異常とした「連合弛緩」などは見られない。しかし、彼らは就労しても、その多くはイジメや喧嘩の末、病院へ帰ってきてしまう。彼らは、どのようなコミュニケーション上の逸脱行動をとっているのだろうか？

元来コミュニケーションは1人で行えるものではない。コミュニケーション上の逸脱は参与者全員の問題である。コミュニケーションにおいて逸脱行動が成立するためには、同じ言語や文化を共有する誰しもが従うことが期待されるコミュニケーションや会話のためのルールが存在している必要がある。しかし、そのルールは暗黙的で不可視であるがため、意識化できないコミュニケーション上のギャップに困惑や苛立ちが立ち現れる。本節では、実際のCHたちの会話の観察を

通じ、彼らがどのようなコミュニケーションのためルールに逸脱しているのかを可視化することにする。

2.1 会話のまとまりの喪失

まず、精神障害者らの会話を観察することから始めよう。分析の対象としたのは、慢性期の統合失調症・(躁)うつ病・てんかんなどの病歴を持つCH3人による自由会話(1会話約30分×20組)である。対象となった会話参加者は茨城県下の病院に附置されたデイケア施設(日中のみ開設され、作業療法などを行う施設)に通う人々である。会話は3人一組で車座に座って話すようセッティングした。そして、会話開始前に、サイコロを渡し、出た目のトピックから話し始めるよう指示した。ただし、途中で話題が変わっても、サイコロを振り直しても良い旨を伝えた。

(例1) 1131 40.0750-165.068

Aは統合失調症発症(17才)より6年、Bは躁うつ病発症(37才)より8年経過、Cはてんかん発症(17才)より7年経過という病歴を持つ。抜粋箇所は、この会話の開始部分である。

14 Cの発話がこの会話最初の語りとなる。

- 10 C: ん:びっくり(D_シ)最近びっくりしたな
11 A: うん
12 C: した話しは:=
13 A: =うん
14 C: ん:ちょっとバレンタインだったから[:ちよっ]と落ち着かなかつたりちょっと薬忘れたり
15 A:
[ん<laugh>]
16 A: うん
17 C: り:しちゃったことかな
18 A: <laugh>
-> 19 A: 短いな:
20 C: は[い]
21 A: [そ]いで終わりか=
22 C: =以上です[:]
23 A: [以]上だ
-> 24 A: じゃ:あたしじゃ:次あたしね
25 B: ん:
-> 26 (7.5秒)
-> 27 A: <laugh>びっくりした話だ
28 A: 私はコンビニの:
29 A: サラダとあのデザート食べたのね
30 A: そしたらね吐いちゃって
31 A: なんかね血まで出ちゃって
32 B: え
33 A: 血の(0.34)血(0.33)血[のね]
34 B: [血のか]たまり
35 A: 血の塊[じゃ]ないけど血の液体が出ちゃって=
36 B: [ん]
37 B: =ん
38 A: (W_イップ|一杯)(D_ソソ)一杯ちよっ
飲みすぎたんだけど[:]
39 B: [ん]
40 A: (D_ハ)吐かなかつただけど:
41 B: ん
42 A: あの吐いちゃってあ誰も居なくなっちゃった
43 A: <laugh>
44 A: そう誰も居なくなっちゃうの

45 B: んん:
 46 A: で
 47 A: そしてね(D_八)(D_八レ)吐かないな:と思いな
 がらジュース飲んでたんだけど
 48 B: んん
 49 A: 良かったんだけどね=
 50 C: =んん:
 51 A: うん
 52 A: びっくりした
 53 A: って吐いちゃったんだよサラダ[とか]
 54 C: [んん]
 55 C: [私]も
 56 A: そう
 => 57 C: 私も昨[日吐いちゃった]
 58 A: [(D_ダイジョブ|大丈夫)]なの
 59 A: あの三角コーナーに:吐いたからまだいいけど:
 60 A: その場で吐いちゃったこともあったか[ら:]
 61 B: [ん:]
 62 A: 以上です
 63 B: はい
 -> 64 A: はいよBちゃん
 -> 65 B: はい
 66 B: 何話そ
 67 B: 困った[な:]
 => 68 C: [私も昨日(W_ハイ|吐いた)]吐いたばかり
 だもん
 69 A: [困ったな:]
 70 B: びびった話
 71 A: びびっ[た話]
 72 B: [何びび]ったる[:あたしび]びることない
 [んだけど:]
 73 A: [<laugh>]
 74 A: [<laugh>]
 75 A: じゃ[もう一回]もう一回転がして
 76 B: [困ったな]
 77 A: もう一回転がして
 78 B: びびることあんまないんだけど
 79 A: びびったことないの[あんまり]
 80 B: [ないんだよ]

話題の移り変わりに着目しよう。17 Cで終了した語りに対し、Aは「短いな:」(19)というメタコメントと発話が終了したのかどうかの確認(21, 23)のみで、次の話題に移行する。そして、28から語られるAの体験談は内容的に非常にショッキングなものとなっており、これに対する聞き手からの相応の反応が期待される。この話題が完結し得る位置53 Aで、Cは自分も同様の経験を直近に経験したというsecond storyの端緒を開こうとする(55 C, 57 C)。Cが開始しようとしたsecond storyへの試みが成功するためには、他の会話参加者らに、55, 57を、単に先の語りへの承認や感想ではなく、これから語られるsecond storyの先触れとして承認してもらう必要があった。しかし、Cのsecond storyの開始はAの語りの継続部分と重複してしまったために、この発話(55,57)は無視あるいは聞き逃され、second storyへと発展していない。語りの継続によって中断される。そしてAの語りが再び完結するや否や(62 A)、AはBに話すよう促す。Bは次に話すことを受け入れはするが(65 B)、

話題にあう語りを見つけないことができず、躊躇する。ここでCが再び、68 Cで先のAの語りのsecond storyを語り出そうとするが、この発話はAにもBにも取り上げられることなく、再びサイコロを振り直し、Bが語り得る話題の選択へと会話は流れていく。これはsecond story失敗のひとつの例である。他の例では、中ほどまで進行したsecond storyが他者の発言によって断絶されるものもある。その場合、そのsecond storyの開始部に遡って、それが果たしてsecond storyとして参加者らに認識されていたのかどうかという疑念が生じてくる。著者は、このデータを見て会話が解けていくような奇妙な感覚におそわれた。

2.2 会話をひとまとまりにするもの

Halliday and Hasan (1976)は談話の結束性は、ある要素の解釈が別の要素の解釈に依存する場合に生じると述べている。この時、ある要素の解釈の前提として別の要素が存在することになり、この二つの要素の間には結束関係が成立するとされる。そして、相互の要素の意味関係だけでなく、モードやモダリティ、強調など様々な対人関係の要素まで含めた使用の首尾一貫性^{coherence}が含まれたとき談話あるいはテキストとしてのまとまりが生じるとされる。

ただし、彼らが挙げている結束性を生み出すための言語の修辭的要素 - 指示、代用、省略、照応など - だけでは、例1のような会話の非結束性を説明できない。そこで、会話を一連の流れの中に置くための発話間の接合の型として少なくとも次の3つのパターンがあると考えられる。

^{いかり} 錨型接合 先行発話中の音や単語を用いることで、先行発話との関係性をもたせる接合である。ただし、その接合の仕方は局所的であり、相手発話全体を理解していなくても達成できると考えられる。会話分析で指摘されている「会話の中のポエティクス」(前の発話中で使われた音素や同義語を次の人が使うという現象)もこのタイプの接合に分類できるであろう。TDIで評定項目に挙がっている「保続」(相手発話の最後の言葉を繰り返すという症状)も錨型接合といえる。発話間のポイントどうしをつなぐという意味では、Hallidayらが挙げている指示、代用、照応、同一の単語の繰り返しなどはこのタイプに分類できるだろう。

^{くさび} 楔形接合 先行発話と次にくる自分の発話との関係性を明示するフレーズを使用することで、それら二つの接合を強化するものである。典

型的には談話標識が挙げられる。Hallidayらが挙げている接続詞、接続付加語はこれに相当する。彼らも、接続が指示や代用等の結束関係とはかなり性質が異なっていることを指摘している。「話が少しずれますが」「Xさんと同様に」など先行する発話との関連性を標示することによって、次発話との関係が離れないよう、その合間に挿入されるフレーズもこのタイプとみなす。

^{かすがい} 銚型接合 先行発話と後続発話の両方に渡って複層的関係を有する発話による連結であり、g典型的には隣接対第2部分が挙げられる。Clark (1992)が挙げている例を示そう。02 Bの発話はAへの応答を示すと同時に、Aに03においてこの情報に対する反応を返すよう求める発話にもなっている。例2の02 Bのような発話は、先行発話(01)でAが言わんとしたことを理解したという証拠であると述べている。

(例2)

- 01 A: How far is it from Huddersfield to Coventry.
02 B: um. about um a hundred miles-
03 A: so, in fact, if you were . living in London

先に挙げたようなsecond storyは銚型接合であると考えられる。串田(1997)によれば、話題移行はstepwise topic movementとboundary topic movementの2つに類別される。前者は話題開始・終了の明示的な手続きが用いられることなく、1発話ごとに徐々に話題が推移していくものである。一方、後者は、進行中の話題を一度終了してから、topic initial elicitor(「最近どう?」など)やtopic proffering(「試験どうだった?」など)によって新たな話題を開始するというものである。ここで銚型と呼びたい語りの移行は前者のstepwise topic movementである。第1の語り(first story)と同じ構造を持つ2つ目の語り(second story)が他の参加者によって語られるようなとき、stepwise topic movementは達成されるとされる(串田, 1997)。second storyの例としては、第1の語りと同じ役割の登場人物が出現する語り¹が挙げられる。Sacks(1992)の例では、1人が自動車事故を目撃したことを語ると、相手²がその後で墜落を目撃したことを語る、というものである。串田は、second storyには、同一役割の登場人物が出現するばかりでなく、主題や場面、細部の導入の仕方や順序といった様々な構造が最初の語りと共通していることを指摘している。そして、筆者の手元のデータ(上記と同様のデザインの千葉大生3人会話)を見るならば、同様の語り口がthird story, fourth storyへと繋がっている例が散見される。このような時、second storyは、first storyとthird storyを、third storyはsecond storyとfourth

storyを銚型に連結していると捉えることができるだろう。そして、second story, third storyは前の語りの構造を抽出しなければ語れない以上、前の語りに対する非常に強い理解の証拠を提供していると言える。

2.3 second story を成立させるためのメタコミュニケーション

second storyを成立させるためには、次の2つの条件が必要である。(1)その語りの開始部において、今からsecond storyが語られるということを参加者全員が承諾しなければならない。そして、(2)second storyが語られた後、それがまさにfirst storyと同じ構造を持つものであることを参加者全員が納得しなければならない。これらの条件を満たすため、次のようなメタコミュニケーションが行われていると考えられる。

語りの開始に際して、語り手が『これから私がsecond storyを話しますよ』というメタメッセージを発すると、聞き手たちはそのメッセージを解釈し、『これからsecond storyが語られる』ことを承認するというメタメッセージを直後に発する。これらのメタメッセージのやりとりによってsecond storyはそれを開始することが公となる。しかし、語り¹が開始されるだけではまだsecond storyとして不十分であり、それがまさにfirst storyと同じ構造を持ったものであることが証明されなければならない。語り手はfirst storyの構造を抽出し、それと同形の語りを構成する必要がある。聞き手たちも同時にfirst storyの語りの構造を参照しつつ、語りの主題や落ちを予測や確認する。third story, fourth storyと続く場合は、それらが語られる間中、first storyによって発された語りの構造に対する参照をし続ける必要がある。そして、この構造を抽出し、同形であることを示したり、承認したりすることを通じ、語り手や聞き手たちは『first storyを正しく理解しましたよ』というメタメッセージを交換しあうことになる。

すなわち、second storyが語られるという出来事において、会話参加者たちは、自己の体験を語るという視点だけでなく、先に語られたことやこれから語られるべきことの流れに目を向けていなければならない。これをメタ的視点と呼ぼう。会話の流れを一連のものにまとめあげているのはまさにこういったメタ的視点に基づくメタメッセージの交換であり、それがメタコミュニケーションである。

例1のような会話が著者を不安にした原因の一つは、こういったメタコミュニケーションの形跡が

認められなかったためであろう。second story の不在は、会話を一続きのものにする手段の欠落を意味しており、今その場所で語られている話題が、前後の語りとどのような関係性のもとで理解されているのか、あるいはそのような理解が全く行われていないのかを不透明にする。これが、会話参加者どうしがその場で構築していくべきコミュニケーションの基盤を緩めているといえる。

3. 高次脳機能障害者の会話場面における話し手/聞き手のメタ認知(岡本)

これまでメタ認知の問題は学習中における自己の進捗のモニタリングや学習の不首尾の知覚に基づく戦略の調整といった場面に限られて語られることが多かった(Winn & Snyder, 1996)。こうした自己のメタ認知機能が学習法や最適な戦略の発見という側面にのみ適用されるのは、「モノ」とのインタラクションとして学習が捉えられてきたからである。しかしながら、我々は「他者」とのインタラクションであるコミュニケーション場面においても同様のメタ認知能力を運用しなければ、より円滑なコミュニケーション戦略を獲得することは不可能であろう。それは幼児期の養育者とのインタラクションを通じて培われてきた社会的能力であり、さらに成人した後でも常に他者とのコミュニケーションをいかに改善するかは終わりのない課題として我々に突きつけられている。

しかるに、言語コミュニケーションはその構造的な性質上、参加者に様々な種類やレベルのタスクの遂行を要請しており、どのようなメタ認知能力がそこに関わっているのかは自明ではない。本章では、まず言語コミュニケーションに内在する多様な関係性のドメインについて明らかにし、次に会話において話し手や聞き手がそこにどのようなレベルで関与しているのかを話し手と聞き手それぞれの表出行動の観点から考察する。最後に、メタ認知的と考えられる表出行動が健常者と高次脳機能障害者との間で分布がどのように異なっているのかを会話データの観察を通じて分析することで、コミュニケーションにおけるメタ認知とは何かについての議論の端緒としたい。

3.1 3つの言語媒介的關係

会話というコミュニケーション場面において話し手が行うことはなんであろうか。一般に考えられているのは話し手がある事態を認知し、それを言語化し、聞き手に対して表出するという一連のプロセスである。無論、ここで言及される事態には外的な出来事としての事態もあれば、自己の欲

求や信念などの内的な事態も含まれる。話し手が行っているこうした一連の発話産出プロセスは、その性質上、時系列的なものとしてのみ捉えられがちであるが、こうした発話という話し手の営為を通して聞き手に与えられるのは、話し手・事態・聞き手という三者間の相互関係全体である。つまり、聞き手にとって事態が「情報」として示されること、話し手が事態を「認知」していること、そして話し手が聞き手に何らかの「行為」を行うこと、の全てが含まれているのである。発話が伝えるこれらの話し手・事態・聞き手の三者間の相互関係をここでは仮に「言語媒介的關係¹」と呼んでおくことにする。

さて、聞き手はこうした言語媒介的諸関係を発話という一つのパッケージを通して受け取るため、聞き手はそのいずれに対しても反応することが可能である。例えば次のような例はいわゆる承認の「うん」が実際には何を承認しているのかが非決定のまま投げ出されていることを示している。

A: 昨日枕元に幽霊がいてさ
B: うん

上の例の場合、Aの発話は「昨日Aの枕元に幽霊がいた」という事態を伝えるとともに、Aが(事実の真偽はどうあれ)そのように認知したことを伝え、そしてAがその発話を通して何らかの(発話)行為を行ったことを示している。従って、仮にBの発話は何らかの承認を行っていたと考えられるとしても、事実としての事態の承認であるのか、話者の認知の承認であるのか、はたまた話者の発話行為の承認であるのかは決定されない。このことは、仮にAの発話をBが承認しない場合に、「そんなわけないだろう」「そう見えただけじゃない?」「それがどうしたの?」など様々な言語表現によって、Aの発話のどの言語媒介的關係に対しての疑義や否定を示しているかを明示化することが可能であることから分かる。

ここで、本企画の主題であるコミュニケーションにおけるメタ認知について考えると、発話に含まれる上記の言語媒介的關係のうち、話し手と事態との関係、つまり話し手がどのように事態を認知しているかについての認知や理解が主な対象となる。これは話し手自身にとっては事態をどのように認知しているかを明示的に示すという行動として表出され、聞き手にとっては話し手がどのようにその事態を認知しているかを自分がどのよう

¹なお、実際にはBuhler(1934)が提案したオルガノンモデル(organon model)に基づく、先の三者それぞれと言語との関係としての「言語機能的關係」も存在するが、本稿での議論には直接関係しないため取り上げない。

に認知ないしは理解しているかを明示的に示すという行動として顕在化する。

以下、この両者についてヘッジ表現と理解提示方略のそれぞれから考察する。

3.2 ヘッジ表現：話し手の認知の表出

まず、話し手と事態との関係を前景化する言語表現としてヘッジ表現に注目しよう。

「ヘッジ表現(hedges)」は元々Lakoff(Lakoff, 1973)によって最初に中心的に扱われた言語表現で、その機能は「意味をより曖昧にしたり、曖昧さを軽減したりする機能をもつ語」であるとされた。例えばLakoffが挙げた英語のヘッジ表現のリストには以下のようなものが含まれている：

more or less, sort of, kind of, in a sense,
in some sense, really, actually, so to say,
strictly speaking, loosely speaking, literally,
basically, theoretically, so-called, one might
say that, let us say that

Lakoffはこうしたヘッジ表現を真理条件やカテゴリーの観点から分析した。

これに対し、Brown and Levinson (1987)はポライトネスの観点からヘッジ表現の待遇機能について言及しており、そうしたヘッジの機能を持つものとして不変化詞、副詞、挿入句といった言語的な要素以外にも、ジェスチャやポスチャなどの非言語的要素も含めることを提唱している。

こうしたヘッジ表現研究の展開を受けて、入戸野(2008)は日本語のヘッジ表現を「陳述、質問、申し出、命令といった命題の中、前、または後ろに置かれ」、以下の5つの機能を持つものとした：

1. 情報の正確さに確信が持てないことを示唆する(例：八時ごろだったかな)
2. 感情表現を緩和する(例：...っていうか)
3. 意見、考えを曖昧にする(例：いまいち、タイプじゃなかったかも)
4. 自分の行動に言質を与えないようにする(例：会えるとは思うけど...でも、よくわかんない)
5. 話し手が発言する権利を確保、維持したり、聞き手を会話の中に積極的に参加させる(例：あのう、なんか、なんか、何ていうの、いいかげんにしろって感じじゃない?)

このようにヘッジ表現の定義は研究者によって様々であるが、概略、当初のLakoffの定義が命題としての事態と話し手との関係性の表出として捉えたものであったのが、次第に話し手と聞き手との対人関係的機能を含むものへと拡張されてきたと言えるだろう。実際、Lakoff自身もヘッジ表現が社会において無用な軋轢を避けるために用いられるとして、その待遇機能について言及している。

しかしながら、こうした定義の拡張が生じているのは、前節で述べたような発話自体が持つ複合的な性質を混同しているためである。つまり、ヘッジ表現は伝えるべき事態と話し手の関係性を前景化する機能を持つが、それは話し手と聞き手との関係性も構築する可能性を有している。従って、後者の待遇表現的機能の観点からヘッジ表現の定義を拡張するのは一種の過大般用であり²、もう一度Lakoffが提起したヘッジ表現における話し手と事態との関係に立ち戻る必要がある。

Langackerらの提唱する認知文法の文脈では、同一の事態が認知主体としての話し手のパースペクティブの違いによって異なる発話として表現されることが重視されてきた。典型例としては、同じ坂であっても認知主体が取るパースペクティブによって「上り坂」と「下り坂」という二つの表現が可能であることが挙げられる。「厳密に言えば」とか「ある意味」などのヘッジ表現もこうした認知主体としての話し手の認知を反映したものであると言えるが、前者のように話し手の認知が「埋め込まれた」言語表現に対し、後者のヘッジ表現が話し手の認知を明示的に「付加した」言語表現であると捉えるならば、そこには論理階型の違いが存在すると考えても良さそうである。言い換えれば、全ての発話には話し手の認知が非明示的に反映しているが、それを明示的に表出するためには自己の「認知の認知」としてのメタ認知が関わっているとと言えるかも知れない。

3.3 理解提示方略：聞き手の認知の表出

3.1で述べたように、聞き手は発話が内包する言語媒介的關係のいずれに対しても反応することが可能である。聞き手が話し手に対して行う代表的な反応として、話し手の発話を理解していることを示すものがある。Clark and Schaefer (1989)はこうした当該発話の理解を示すために行う聞き手の行動を以下の5つのタイプに分類する：

1. 注意の継続(Continued attention):話し手の発話に引き続き注意を払ってみせることで現在の発話に満足していることを示す
2. 関連する次発話の開始(Initiation of the relevant next contribution):現在の発話と同じぐらい高いレベルでの関連性を持つ発話を次発話として行う
3. 承認(Acknowledgment):うなずいたり、“uh huh”や“yeah”などの短い返答を行う
4. 理解部分の明示(Demonstration):話し手の意味を理解した内容の全体ないしは一部を明示する
5. 逐語的提示(Display):話し手の発話の全体ないしは一部を逐語的に提示する

²特に入戸野(2008)の挙げる後半部分はその典型である、

これは話し手の発話を理解していることを表出するために様々なやり方が存在していることを端的に示しているが、認知の認知としてのメタ認知がどのように反映されているかは未だ明らかではない。繰り返しになるが、聞き手は発話が内包する言語媒介的関係のいずれに対しても反応することが可能である。しかし、先述した例の「うん」がそうであったように、Clarkらの分類における1や3の聞き手行動はどの言語媒介的関係に対して行われたものであるかは非決定のままとなる。言い換えれば、単に話し手の発話行為に対してのみの承認を示すために「うん」と言っているのか、話し手の事態認知そのものを理解した上でそれを含めて承認しているのかは分からない。それに対し、Clarkらの挙げる4や5の聞き手行動は事態の「情報性」ないしは話し手の「認知」のいずれかについての理解＝認知であることを前景化する。明示的に聞き手自身の理解を示すこうした聞き手行動を「明示的理解提示方略」と呼ぶことにすると、聞き手の側において話し手の「認知の認知」としてのメタ認知が働いている可能性を調査するためには、このタイプの理解提示方略の詳細な実態を知ることが手掛かりとなるだろう。

3.4 高次脳機能障害と健常者の会話データからの観察

ここまでの考察により次のことが示唆された。一つは、話し手の認知状態の表出には非明示的なものと明示的なものがあり、後者には表出そのものに対する調整が潜在的に行われている可能性があり、その意味でメタ認知過程の介在が予想される。次に、聞き手による発話に対する理解の表出にも、やはり非明示的なものと明示的な方略があり、後者は話し手の認知についての理解を含む可能性が高いため、聞き手によるメタ認知が行われているという予測が強まる。

そこで、実際に高次脳機能障害者を中心とするCHらの会話データを観察することで、話し手と聞き手のメタ認知についての知見を得ることを試みた。分析の対象としたのは、高次脳機能障害と診断されたCH12名をターゲットとし、さらに慢性期の精神障害(統合失調症・躁うつ病・てんかん・知的障害)を抱えるCH8名と、病院のスタッフ(ケースワーカー・作業療法士)2名およびコミュニケーション研究者1名による3人会話(1会話約30分)10組である。2.1節で扱われたデータと同様に、話題(例:情けない話、恋の話)が各面に書かれたサイコロを自由に会話参加者が振ることで会話を進めるように指示した。

その結果、まず観察されたのは、当初の予想と異なり、高次脳機能障害者どうしの会話では顕著なコミュニケーション的逸脱は観察されなかったということである。もちろん、一口に高次脳機能障害と言ってもその障害部位や臨床的症状は様々であり、いわゆる短期記憶障害を持つCHでは同一の話題を何度も繰り返そうとして他の会話参加者にたしなめられる場面も見受けられた。また、性的な話題を对人的配慮なしに頻繁に口にしているCHも存在した。しかしながら、そうした逸脱場を除けば、概ね会話は円滑に進行していることが全ての3人会話事例で確認された。

次に、話し手の認知の表出方略としてのヘッジ表現が高次脳機能障害者においては健常者とほぼ同様に用いられていることが観察された。以下はその典型的な例である。

3931(2.04) 後は、ふーん、年とって、老人ホーム入って、はいっケニー³、って感じですね
4231(4.00) いい女が入って来たと思ったん
じゃないですか
4331(19.19) (運転)できないかつちゅうか:高校の先生だったみたい
5131(14.28) だからそういうなんというの:ちゃんとやる時はやれって言いたい

このように、高次脳機能障害者はストーリーテリングにおいて健常者と同程度のヘッジ表現を用いて発話を行っており、その意味で話し手としての逸脱的な症状を示すことはない。また、別の相手に話を振ったりすることも普通に観察された。一方、聞き手行動としては、現在の話し手の発話に対する評価的コメントは頻繁に観察できる。

4531(8:08-8:11)
A: まあ驚きって言うよりは悲観ですね
B: くやしいですね
A: はい

他にも「それはすごい」「うまいうまい」「それはそうだ」など、評価的コメントは健常者と同様に用いられていることが分かった。また、相手の発話の一部に対する聞き返しも多く観察される。このように、高次脳機能障害者どうしの会話の観察だけでは一見すると健常者とほとんど変わらないやりとりがなされているように感じられる、しかし、健常者を交えた会話場面を観察すると、高次脳機能障害者の発話には見られない特定の理解提示方略が浮かび上がる。それは相手の話に対する言い換え(paraphrasing)やりフレーミング(reframing)(Watzlawick et al., 1974)である。次のような会話例がその典型である(N:健常者)。

³発話者が以前通っていた障害者施設の名前である。なお、この例を含めて全ての固有名詞は仮名としている。

2531(23.26-23.29)

CH1: ちよとなんかこう,
CH1: 放し飼いの犬って[いうのは, ちよと怖いよね
N1: [ああ, たまにいますね, 首輪付け
ないのね

2431(12.24-12.30)

CH2: けいちゃん黙っててずるいよ. 黙ってて500円取るの
N2: (laugh) じよ, 情報料

こうした相手の発話を単に繰り返すのではなく, 自分の言葉で言い換えたり, 詳細化として別の情報を付加したりすることは, Clarkらの提案する明示的理解提示方略よりもさらに高度な方略であると考えられる. つまり, こうした相手の認知を単に理解するだけでなく自分の認知に従って置き換えるタイプの方略の背後にはメタ認知的過程が関わっている可能性が高い.

以上の観察から, 高次脳機能障害者は(1)話し手として自己の事態認知を明示化するヘッジ表現を普通に用いており, (2)聞き手として相手の発話に対する評価を行ったり聞き返しを行っている, という点では健常者と変わらないが, (3)相手の発話を言い換えたり表現枠を変えるような高度な聞き手行動は示さない, ということが分かった. このことは, 自己の認知や他者の認知の明示的表出そのものが, 即メタ認知過程を内在するとは言えないことを示唆している. そして, 他者の認知した事態についての自己の認知に基づく言い換えなどは, メタ認知能力が関わっている可能性が高いと言えるだろう.

本章での予備的考察では, 高次脳機能障害者が会話の中でメタ認知を実際に行っているかは未だ不明のままである. 今後は健常者どうしの会話場面の観察との比較を通じて定性的・定量的な分析を進めることで, コミュニケーションにおけるメタ認知についてさらなる検証が求められる.

4. メタコミュニケーションはメタ認知か (高梨)

「コミュニケーションギャップ」について考察する上で, Batesonによる「メタコミュニケーション」の概念が有効なのではないかと考えられる. 一言で言ってしまうと「メタ認知」とは「認知についての認知」であり, 「メタコミュニケーション」は「コミュニケーションについてのコミュニケーション」である. そして, コミュニケーションは認知活動を不可欠のものとして含むと考えるならば, メタコミュニケーションはメタ認知の一種であると考えられそうである. しかし, 実際には, 従来の「メタ認知」研究において, コミュニケーションはその対象となりにくかった. 本節の目的は, その理由を理論的に検討することである.

4.1 メタ認知とメタコミュニケーション

メタ認知とは「記憶, 注意, 理解, 推論, 錯覚などのような特定の認知的営み(認知過程や認知的状態)に関して人が抱えている知識やそのコントロールの仕方(自己制御メカニズム)に関する認知」のことである(丸野, 1989). メタ認知は「メタ認知的知識」(人間の認知特性についての知識, 課題についての知識, 方略についての知識)と「メタ認知的活動」(メタ認知的モニタリング, メタ認知的コントロール)に大別される(三宮, 2008). このうち, 本節に直接関わるのは, メタ認知的活動の中の特に「メタ認知的モニタリング」である.

一方, メタコミュニケーションについて, Bateson(1972)は, 2匹の子ザルが噛みつき合いながら遊んでいるのを観察し, 表示レベルにおいて通常ならば攻撃などを意味するはずの「噛みつき」という振る舞いがメタレベルにおける「これは遊びだ」というメタメッセージによって, 本来意味するところのものを意味しなくなることを見出した. つまり「本気じゃない」というシグナルが, それによって分類されるメッセージ「噛みつき」に対するメタメッセージとなっており, こうしたメタメッセージはメッセージより高次の論理階型に属していると考えられるのである. この点について, Batesonの考え方を継承したWatzlawick et al. (1967)は「全てのコミュニケーションは内容と関係の側面を持ち, 後者は前者を分類するので, メタコミュニケーションである」という公理を提案している.

4.2 認知か社会か

一般に, 認知活動は主体の個人内的過程であると見なされることが多いのに対して, コミュニケーションは明らかに複数の主体の間で起こる活動でもある. 従って, Watzlawickらに倣い, 複数主体の関係に関わるレベルを「関係性」と呼ぶならば, コミュニケーションには個人内認知と社会的な関係性という2つの側面が含まれていると見なせる. そして, 従来, コミュニケーションがメタ認知と関連するものとして扱われて来なかった理由の一つは, この「メタコミュニケーション = 関係性」という図式の流布によって, コミュニケーションにおける認知の問題が見えにくくなっていたことによるのではないかと考えられる. そこで, 以下では, この点について, コミュニケーションに含まれる認知的過程, メタ認知の持つ社会性, という両方向からの考察を試みる.

4.3 発話のモニタリングと修復

まず、コミュニケーションに含まれる認知的過程について、発話のモニタリングと修復を例に検討する。

Levelt (1989)によれば、発話者は発話産出の際に自分の発話内容を自己モニタリングしているが、これには発声される前に発話者の思考過程の内部で行われる内的ループによるものと、発声後の発話を発話者自身が聞いて判断する外的ループによるものの二種類がある。これらはどちらも自己の認知活動についてのモニタリングであるという意味で、通常のメタ認知研究の範囲内に含めることのできる現象であるといえる。

しかし、会話分析研究者から指摘されてきたように、内的モニタリングの場合とは異なり、外化された発話は、発話者自身による（外的な）自己モニタリングだけでなく、聞き手による「他者モニタリング」にも晒されている、という大きな相違がある。Schegloff et al. (1977) は会話における修復(repair)のデータを分析し、言い誤りや聞き損ないなどの修復の場合、話し手と聞き手の「どちらが修復の必要性を唱えるか」、そして「どちらが実際に修復を行うか」の二軸の組み合わせからなる四通りの選択肢が見られることを明らかにした。また、言い間違いなどの修復とは異なり、誤解の修復の場合、聞き手の誤解が第一ターンの話し手にとって明らかになるのは第二ターンでの聞き手の反応を通じてであるため、第一ターンに対する誤解修復が発動するのは第三ターン以降になる(Schegloff, 1992)。

他者モニタリングとは、言わば「他者の認知」についてのメタ認知である。従って、自己モニタリングや自己修復がメタ認知であるならば、他者の言い誤りや誤解などのトラブル源への気づきも一種のメタ認知であると言えるだろう。しかし、その修復が一個人の認知プロセス内に閉じないのは、たとえその原因が結果的に一方の個人の認知に帰せられることになるとしても、その解決は個人内の認知プロセスだけでは行いえず（少なくとも、一旦滞った会話を再開させるという課題がある）、話し手と聞き手の間で問題認識が表明され、共有されなければならないためである。

4.4 コミュニケーションギャップの帰属

上記の修復手続きによって個々の問題箇所が修復されたとしても、コミュニケーションギャップの解消の際にはこのギャップをどこに帰属するかという問題が生じることが多いため、関係性に関わ

る、いわば社会心理学的な問題は依然残っているという可能性がある。このように考えるならば、社会心理学における帰属理論や対人認知研究も本研究の関連領域の一つに含まれると考えられる。

例えば、会話中の誤解や無理解について、われわれは、単に「(話し手と聞き手の両者を含む)コミュニケーションに問題があった」という喧嘩両成敗的な説明だけでは納得できず、実際には互いに「相手が悪い」などと判断することも多い。あるいは、あるギャップやトラブルを一方の参加者の「障害」に帰属して疑似解決した気になる、という可能性もある。言い換えれば、「コミュニケーションは認知活動の一つである」という視点から議論を開始するとしても、コミュニケーションギャップの発生は印象形成や対人理解といった関係性のレベルでの問題に至る可能性がある、ということである⁴。

4.5 メタ認知の社会的起源

しかし、コミュニケーションギャップの発生自体が問題なのではない。モニター役としての「他者の目」に直面することには、「自己の内面的な考え方が、他者によって外面的に映し出される（外化される）と、人は、何処が問題で、何処に矛盾点があり、何処に必要な条件が欠如しているか判断が容易になり、自分で修正、操作する可能性も高まる」（丸野, 1989）というポジティブな効果もある。従って、コミュニケーションギャップの問題をすべて関係性のレベルでの問題と見なして事足りりとするのではなく、これが認知発達の中で果たす反射的な役割について検討する必要がある。

そこで、認知発達の中には他者との関係が本質的に含まれているのではないかと考えてみる。メタ認知の発達の起源の考察においては、Vygotskyの認知発達理論が参照されることがある(三宮, 2008)。Vygotskyは、他者とのやりとりのために用いられる外言が、発達を通じて自分に向かって内的に発せられる内言として内面化することによって、言語が思考を媒介し、思考過程をコントロールするようになる、と考えた。この視点からは、自らの思考に対するメタ認知の起源は、本来、他者からの発話という社会関係の中にあると考えることができる。その意味では、Leveltによる内的/

⁴社会心理学的な対人認知研究では、対人認知は対象となる他者の行為などが終了した後で生じるものとして扱われることが多い。しかし、実際にはコミュニケーションはその時点ですぐに終了するとは限らず、それ以降も継続することが多いため、コミュニケーションにおける問題は同じコミュニケーションの中で調整されるし、される必要がある。従って、コミュニケーションギャップの問題は、会話における発話連鎖のレベルの問題として分析するのが適当である。

外的ループの区別も、単に発話や思考のための認知能力を静的に表現したものではなく、他者の視点の内面化というメタ認知能力の社会的起源を痕跡として含み込んだものであると見なすことができる。

4.6 認知も社会も

コミュニケーションの過程には、話し手の発話産出における認知過程と聞き手の発話理解の際の認知過程という2つの認知プロセスが、互いに独立のものとして含まれている、という仮定に立てば、日常的なコミュニケーションにおいてそれほど問題が生じていないということ自体、むしろ驚くべきことだということになる。このことから示唆されるのは、たとえコミュニケーションにおける産出と理解をそれぞれ独立の個人内的過程と見なすとしても、話し手の側の発話産出は既に聞き手の理解という認知過程についての想定を適切に含み込んだものとなっており、逆に聞き手の側の理解の過程にも話し手の発話産出の際の前提などについての想定が含まれていると考えるべきなのではないか、ということである。さらに、こうした他者モデルへの配慮が常に意識されるわけではないとしても、それは発話の産出と理解というコミュニケーションにおける二者の認知過程が個人内的なものとして閉じているからであるというより、むしろ、この過程が既に十分に適切なほどに社会化されているからであると考えの方がよい。このように、メタコミュニケーションをメタ認知の一種として考える上で重要なことは「認知か社会か」という二分法ではなく、認知の社会化のダイナミズムであると考えられる。

参考文献

- Baron-Cohen, S., Leslie, A., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a 'theory of mind'? *Cognition*, 21(1), 93-46.
- Bateson, G. (1972). A theory of play and fantasy. In G. Bateson (Ed.), *Steps to an ecology of mind* (pp. 177-193). The Estate of Gregory Bateson. (佐藤 良明 (訳), 精神の生態学 (改訂第2版), 新思索社, 2000)
- Bleuler, E. (1911). *Dementia praecox oder gruppe der schizophrenien*. Leipzig und Wien: Franz Deuticke. (飯田 真他 (訳), 早発性痴呆または精神分裂病群, 医学書院, 1974)
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, H. H. (1992). *Arenas of language use*. University of Chicago Press and Center for the Study of Language and Information.
- Clark, H. H., & Schaefer, E. F. (1989). Contributing to discourse. *Cognitive Science*, 13, 259-294.
- Den, Y., & Enomoto, M. (2007). A scientific approach to conversational informatics: Description, analysis, and modeling of human conversation. In T. Nishida (Ed.), *Conversational informatics: An engineering approach* (pp. 307-330). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Halliday, M. A. K., & Hasan, R. (1976). *Cohesion in english*. Longman Group Limited. (安藤 貞雄他 (訳), テキストはどのように構成されるか, ひつじ書房, 1997)
- 小磯花絵・伝康晴. (2000). 円滑な話者交代はいかにして成立するか—会話コーパスの分析にもとづく考察—. *認知科学*, 7(1), 93-106.
- Kraepelin, E. (1910). *Psychiatrie. ein lehrbuch fur studierende und azrte. achte auflage*. Leipzig: Verlag on Johann Ambrosius Barth. (西丸 四方・遠藤 みどり (訳), 精神医学総論, みすず書房, 1994)
- Lakoff, G. (1973). Hedges: A study in meaning criteria and the logic of fuzzy concepts. *Journal of Philosophical Logic*, 2(4), 458-508.
- Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. The MIT Press.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on conversation*. Oxford: Blackwell.
- Schegloff, E. A. (1992). Repair after next turn: The last structurally provided place for the defence of intersubjectivity in conversation. *American Journal of Sociology*, 95, 1295-345.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361-382.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1986/1995). *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Blackwell.
- Watzlawick, P., Bavelas, J. B., & Jackson, J. J. (1967). *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. W. W. Norton & Company, Inc. (山本 和郎 (監訳), 尾川 丈一 (訳), 人間コミュニケーションの語用論: 相互行為パターン, 病理とパラドックスの研究, 二瓶社, 1998)
- Watzlawick, P., Weakland, J. H., & Fisch, R. (1974). *Change: Principles of problem formation and problem resolution*. W. W. Norton & Company, Inc. (長谷川 啓三 (訳), 変化の原理: 問題の形成と解決, 法政大学出版局, 1992)
- Winn, W., & Snyder, D. (1996). Cognitive perspectives in psychology. In D. H. Jonassen (Ed.), *Handbook of research for educational communications and technology* (p. 112-142). New York: Simon & Schuster Macmillan.
- 入野みはる. (2008). グループのサイズとヘッジの使用量について. *Proceedings of 15th Princeton Japanese Pedagogy Forum, Saturday, May 3 - Sunday, May 4, 2008*, 93-107.
- 串田秀也. (1997). 会話のトピックはいかにつくられていくか. 谷泰 (編), コミュニケーションの自然誌 (p. 173-212). 新曜社.
- 丸野俊一. (1989). メタ認知研究の展望. 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 34(1), 1-25.
- 三宮真智子. (2008). メタ認知: 学習力を支える高次認知機能. 北大路書房.